茜差す

長月　夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
茜差す

【Ｎコード】
Ｎ３３５９Ｅ

【作者名】
長月　夕子

【あらすじ】
夫婦ってそういうものでしょう。

初詣の柴又帝釈天の賑わいに浮かれ、私達は露店をひやかしながら江戸川の土手までやってきた。私は甘酒で一息つき、夫はイカのゲソをほおばる。

川を見下ろすと矢切の渡しだ。趣のある船着場にこれまた昔の写真で出てきたような小船が一艘着けてある。物は試しに乗ってみようと小走りで向かった。しかし乗り込んですぐに私達は浮かれた己を呪った。

寒い。

川を吹き抜けてきた北風に、容赦なくなぶられる。甘酒で温まった体など一瞬で冷め切り、夫は風にあおられたゲソで顔中タレだらけだ。陽気のいい頃ならこの小船がモーターで進むことにがっかりしたろうが、今はこれが手漕ぎでなくてよかったと心底思った。震えながら無言で船を降り、そして再び後悔する。他の乗客たちはいそいそと土手に停めてある自家用車に乗り込み、あっという間に去っていった。私達は寒風吹きすさぶ土手に取り残された。至近の駅までは歩いておそらく４０分はかかるだろう。

「あ！バス停があったような気がする！」

夫は何の根拠も無い自信に満ちた足取りで、おそらくあると思われるバス停に向かって突然歩き出した。

「考え無しに、あんな船乗るからだよ」という私の悪態は、夫の耳に届く間もなく後方に吹き飛ぶ。

１０分も歩いた頃、ようやく土手下の田んぼの真ん中に、力なくたたずむバス停を発見した。バス停は強風にあおられてがたがたいう。

「本当にバス来るの？」

「来るよ。だってバス停じゃん。時刻表もあるし。後２０分で来るよ」

「２０分！」
３０分歩くか２０分待つか。
「２０分待つ。これ以上歩いたら鼻が風で取れてしまう」
夫は真顔で言った。
２分で私は音をあげる。
「こんな所で立っていたら凍死する！」
すると夫はいきなりその場で跳ね始めた。
「風に向かって歩いたら、その速度分、風に抵抗して寒さが増す。しかしこういう上下運動なら風に対して無抵抗で温まる」
常日頃、夫の言うことには懐疑的な私ではあるが、まさに骨の髄まで冷えそうな関東の空っ風に耐え切れず、私も跳ねる。
そうして私達は畦道の真ん中でぴょこぴょこ跳ね続ける。真冬の午後の日差しはすでに茜がかり、水の張っていない田んぼの土に、長い影がぴょこぴょこ伸びる。ついでにバス停の影もがたがた揺れる。
やがて黄色い日差しをいっぱいに浴びた、バスが彼方からやってくる。
運転手は、あれ、お客がいるよとでも言うような、あきれた顔をして私達を見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3359e/

茜差す

2010年11月16日08時34分発行